

# 地域の伝統的な祭りにおける紙と絵具で作られた灯籠の制作・素材に関する造形的研究 その2

## Study of a production process and materials of lanterns made of paper and paints in local traditional festivals Part 2

吉川 賢一郎  
KIKKAWA Kenichiro

キーワード：地域、伝統的な祭り、灯籠の装飾、素材、制作方法、造形的視点  
Keywords：regional activation, traditional festival, decorative lanterns, material, production method, modeling perspective

In this research we selected festivals which use traditional and characteristic festival lanterns in the areas along Japan Sea coast from Tohoku to Hokuriku regions, and conducted on-site surveys of the materials and production processes of the festival lanterns through the interviews with those involved in the production. The next on-site research report will deal with the Tanabata festival in Murakami city, Niigata prefecture.

### 1. はじめに

本研究では、地域の伝統的な祭りで使用され内部に照明を灯す灯籠の制作・保存・修復に活かすため、紙・絵具・骨組・光源といった素材に着目している。研究では地域の様々な要因から複合的に変化し、日本独自の伝統となっている祭り灯籠の独自性を確保しつつ、祭りの将来への継承と、地域活性化に貢献することを目的とする。

今回の報告では、青森県五所川原市、青森県青森市、秋田県能代市、富山県南砺市、石川県珠洲市、愛知県刈谷市、宮崎県都城市における伝統的で特徴的な祭り灯籠に絞り込み、素材や制作について制作担当者に制作現場で取材した現地調査報告を行なう。なお、新潟県村上市の七夕祭の現地調査報告は、次回で行なう予定である。

#### 1-1 研究対象

本研究の研究対象とする祭り灯籠は、内部に照明を灯し、外部は竹や木材などの骨組に和紙などを貼って染料や顔料の絵具で絵や文字を描き、透過性のある形態で、固定式と移動式のいずれも扱う。また、伝統的な祭りとしての研究範囲は、国、県、市、町、村から無形民俗文化財を受けたものとした。なお、研究対象の祭りの中には、伝統があるものの、無形民俗文化財の指定を受けていないものを一部含んでいることを述べておく。

#### 1-2 調査の内容

研究対象の絞り込みによって選定された調査対象地域では、資料調査とは別に、実際に制作を行っている祭りの保存会、町内の青年会、祭り灯籠の制作を専門とする職人、行政の担当者などに取材を申込み、制作現場での調査を行った。事前に情報を集めて現地の取材を行うものの、現地でなければ知ることのできない情報や資料の発見が多くあり、現地調査の重要性を痛感した。また、各地域の制作現場では、突然の調査取材の申込みにもかかわらず、祭り灯籠の制作、素材に関することや、祭りの現状などを丁寧に説明して頂き、祭りに対する熱意や想いも知ることができた。今回の報告では、素材や制作方法、維持と展開に対する考え方等を中心に、制作現場の様子を交えて進めていく。

### 2. 各祭りにおける現地調査

#### 2-1 青森県五所川原市 五所川原立佞武多<sup>たちねぶた</sup>製作所

五所川原立佞武多の現地調査は、平成26(2014)年9月と平成28(2016)年7月の2回にわたり、青森県五所川原市の「立佞武多の館」に設けられている五所川原立佞武多製作所にて、立佞武多の館館長の菊池忠氏と五所川原市経済部観光物産課所属の技能技師(立佞武多師)齊藤忠大氏に対して行い、加えて、平成27(2015)年2月、ターナー色彩株式会社研究開発室の西原克俊氏に取材を行なったものである。

**概要：**立佞武多の館は平成16(2004)年にオープンし、常に3台の立佞武多を保管・展示している。毎年8月4日から8日まで開催される立佞武多祭で運行される立佞武多の制作期間はおよそ10ヶ月で、立佞武多の館3階に併設される立佞武多製作所にて技能技師(以下：立佞武多師)が中心となり、チームで毎年、立佞武多を制作する。立佞武多師は総合監督としてテーマ、題材、形、造形、色の決定を行う。そしてスタッフに制作の指示を出しながら立佞武

多師自身も実際に手を動かし、いままでにない立佞武多という想いで制作に臨む。全高23m、重さ19tの立佞武多1基あたりの制作費総額は1,200万円から1,300万円で、3年間祭りで使用するため、この間は立佞武多の館で保管・展示し、その後解体される。五所川原市は地理的に青森県の中央に位置し、津軽藩から離れた木材資源、水産資源などの中継を担う商人の町として栄え、関西と文化交流があった。「ヤッテマレ、ヤッテマレ」は立佞武多の囃子方のかけ声である。「ヤッテマレ」とは津軽弁で「やってしまえ」の意味で、この街に住む人々の気質をよく表していると言える。五所川原の巨大ねぶたが地域の記録に登場するのは明治23(1890)年頃とされ、当時、豪商や大地主達の財力の象徴として、巨大ねぶたは高さを誇るようになり、約15間(約27m)に及ぶようになった。「立佞武多」という名称は、平成8(1996)年、復原に携わった市の有志たちによって命名された。

**紙：**立佞武多で使用される紙は業務用障子紙として建材でも使用され、コストは高いものの良質なMOLZA株式会社製のロンテックス雲漢(特特厚口)である。これはテロン素材で強度があり、極めて撥水性の高い用紙である。平成26(2014)年の開催日である8月5日夜から翌6日朝にかけて116mmもの降雨を記録したが、過酷な天候下でも、紙の高い撥水性が立証された。

**絵具と着色方法：**絵具は主に水性塗料(ネオカラー・テントカラー・水彩ペンキ)を使用し、塗るよりも描くように筆で着色する。以前は染料を使用し色付け後、水性ウレタンを吹き付け、日焼けや色落ちを防いだが、これは耐水性が弱い。水性塗料は乾くと濡れても色落ちせず、紙に着色した部分の見目は薄いが、灯りがつくと濃くなる。防水の吹き付け加工はせず、色の吹き付けで防水も兼ねるようになった。現在では主として「ねぶた・ねぶたカラー」を使用しているが、黒は発色を考慮し、ネオカラーの黒と濃墨を1対1の割合で混ぜ使用している。

**絵具の開発：**平成23(2011)年には大阪府寝屋川市に所在する絵具の製造販売会社のターナー色彩株式会社が立佞武多製作所の協力を得て開発した「ねぶた・ねぶたカラー」と呼ばれる絵具が完成した。試験的に使ったのは忠孝太鼓と呼ばれる立佞武多(本能寺の変)で、夢幻破邪のお色直し時に5割を使用し、全体に使ったのは「鹿島大明神と地震鯨」が初となった。この絵具の特徴は、①染料と同等の鮮やかさでクリアな発色、②高い光の透過性、③雨天時でも屋外展示が可能な耐水性、④室内保存(直射日光は避ける)で3年以上の耐光性、⑤顔料濃度が非常に高いため染めやすい、⑥低粘度なので少量の水希釈で使用が可能、となっている。なお、この絵具は、奉書紙またはロンテックス紙での使用を推奨され、布などへの使用には適さない。ターナー色彩株式会社の西原氏によると、「ねぶた・ねぶたカラー」開発のきっかけは、同社で製造するネオカラーを使い、授業<sup>注1</sup>でねぶた作りを行った京都造形芸術大学の教員が、五所川原市に同社を紹介したことがきっかけであったと言う。ネオカラーは、水に溶けるが乾燥後には防水性があるため、短期屋外用絵具として使われた。立佞武多製作所の立佞武多師からは発色、耐水、透明度を上げることが求められ、艶や光沢よりも、顔料<sup>注2</sup>を限界まで多

くして発色をよくするか、和紙への吸い込みをよくするかが重要だったと言う。「ねぶた・ねぶたカラー」は有機顔料を採用しており、粒子の大きさは0.1~0.5ミクロン。一般的な絵具の顔料の粒子は0.1~10ミクロン程度の大きさで、透明性の高い有機顔料を原材料としている。通常、有機顔料より無機顔料は粒子が大きく分散させやすい。染料と顔料の違いは、分子(染料はナノメートル:10<sup>-9</sup>m)と粒子(顔料はマイクロメートル:10<sup>-6</sup>m)の違いで、単位は1,000倍異なる。染料は粒子ではなく水に溶けている。「ねぶた・ねぶたカラー」は水で混ぜて調整できるように顔料を多く入れている。アクリルガッシュには体質顔料<sup>注3</sup>などを使用しマット(艶消し)であるのに対し、「ねぶた・ねぶたカラー」は着色顔料濃度を高くすることに重点を置いており、透明で発色が良い。染料とアクリル樹脂を混ぜたものは、水溶性のため水に溶けてしまい、耐水性が弱い。また、染料がアクリル樹脂に溶解するため、染料を塗ってからアクリル樹脂で被覆することはできない。

**潤筆と乾筆：**立佞武多師が引く線にもこだわりと個性が表れる。ねぶた師の間では筆の線が擦れない「潤筆」と、筆の線が掠れる「乾筆」2つの流派がある。平成28(2016)年時点で五所川原の立佞武多師において、斎藤氏は潤筆、他は乾筆の方法を採用している。斎藤氏は一気に筆の線を描くのではなく、鉛筆線の上を塗っていく。また、塗る過程でも線の幅を削ったり、足したりしてより良い線を探す工程を経る。

**蠟引き：**五所川原では蠟引きを蠟入れと呼ぶ。パラフィン<sup>注4</sup>を溶かして蠟入れを行なう。五所川原に限らず、ねぶた師らによって名称は違うが、作業工程はパラフィンや蠟燭を溶かして行なう同様のものである。

**接着剤：**接着剤は木工用ボンドを使用する。紙が湿って乾いた際に縮むので、1cm幅でのりしろを設ける。

**照明具：**かつては最大330アンペアの電力量を使用したのが、平成28(2016)年に使用した発電機は、一般家庭10軒分に相当する150アンペアであった。裸電球を好むが、現在は国内で生産されていないため、主に蛍光灯を40~60本使用する。蛍光灯の色は着色した部分の色が映えるよう、電球色のは暖色、白色のは寒色に使用する。現在は蛍光灯の光が強いので、立佞武多に光が広く行き渡るようになったが、部分ごとに影が出ないか、光が届くかを入念に確認する。平成20(2008)年制作の「不撓不屈」が電球を使った最後の立佞武多となったが、近年、国外製の電球を購入し、一部に使用している。また、豆電球よりも光量があるナツメ電球や常夜灯も、指先や綱等の細部に使用する。LEDも一部に使用しているが、コストが高く全体への導入が難しい。

**骨組：**骨組は立佞武多一基に対して木材は松等の輸入材を2t、針金は700kg使用している。平成28(2016)年のお題である「歌舞伎創世 出雲の阿国」は、図案に助六の傘があるため、斜めに交わる箇所が多く、立体的な造形とする際に難しく、針金でミニチュアを作成し、忠実に制作した。青森ねぶたは4本柱を立てて、針金で造形を作りながら構造を考へてから骨組を入れていくので、造形と構造を同時に進める制作方法とするのに対し、五所川原の立佞武多では遠征用に分解して移動のできる木組の構造が先ずあ

る。大工職に制作を依頼してブロック状の木枠を積み重ねて大体の構造を制作し、そこに造形（針金）を加える制作方法を行なっている。針金は、8番、10番、12番、14番の4種類を使用するが、10番を中心に使用し、風糸よりも細くて丈夫な綿の撚り糸を独自の巻き方で木工用ボンドを付けながら巻き、針金を固定していく。平成28（2016）年の立佞武多は女性像なので、顔面部分に針金の代わりに3mmと0.8mmの透明なアクリルの丸棒を実験的に使用した。アクリル棒は負荷が掛かり易いため何度も折れてしまい、熟練した紙貼り担当でさえも苦慮したという。また、肌の皺にも見えてしまう影が出ないように心掛けながら、紙の張り合わせ部分にも注意したという。

考察：立佞武多は、五所川原市が全面的に協力している祭りで、復活した祭り灯籠の代表格である。立佞武多師たちが材料をよく研究し、必要な材料は開発依頼をするという先進的な考え方、厳選した素材の良さを引き出しながら使用している点、市外や県外に留まらず海外への遠征を踏まえ、立佞武多の構造を分解できるようにした点が、五所川原の立佞武多を進化させ続けている理由の要因とも言える。また、展示館で3年間保管することが、耐候性の高い祭り灯籠を完成させたとも言えよう。



写真1-1～3. 細かな部分の着色作業とペットボトルの空き容器の利用

写真1-4. 筆跡によるグラデーション

写真1-5. 作業場での保管

写真1-6. 整備された五所川原の街並み

写真1-7. 光量の調節による骨組の影を消す実験

写真1-8. 展示されている「歌舞伎創世 出雲の阿国」

## 2-2 青森県青森市 ねぶたラッセランド

青森ねぶたの現地調査は、平成28（2016）年7月、青森県青森市に所在する「ねぶたの家ワ・ラッセ」の案内ガイド、ねぶたガイド隊、ねぶた師の外崎白鴻氏、ねぶた小屋「ねぶたラッセランド」でNTTグループのねぶたを制作中であった北村春一氏に、青森ねぶたの制作と素材についての詳細を伺った。

概要：毎年8月1日から7日まで開催される青森ねぶたでは、ねぶた制作を行なうためのねぶた小屋「ねぶたラッセランド」を、青森県観光物産館アスパム裏の青い海公園に毎年4月中旬から設け、ここでは22台のねぶたを制作出来るよう、1区画を縦・横11.5m、高さ8.5mとする。通常はこの小屋の外からしか様子を見ることはできず、祭り間近の緊迫した作業場に見物客は立ち入ることができない。しかしながら、最近ではSNSを用いて告知し、限定した時間だけ小屋の中を見学させるねぶた師もおり、観光客を歓迎する動きも出ている。また、公園内にはねぶた祭り開催前の約1か月間、制作現場を案内するガイド案内所も設置され、普段立ち入ることの出来ないねぶた小屋を案内してもらうことができる。青森ねぶたの2度目となる現地取材では、ねぶたガイド隊にお願いし、ねぶた小屋を見学することができた。青森ねぶたでは、多くが企業や組織がねぶた師に制作を依頼して祭りに参加するが、平成28（2016）年度は「ねぶた愛好会」と「わたしたちのねぶた」の2団体が自費参加した。こうした団体は、デザインしたTシャツ、手拭いの販売や寄付によって資金を集め、それぞれの本業を終えた夜や休日でねぶたを制作している。ねぶた1台あたりに掛かる材料費は500万円程で、人件費などを入れた総額は1,000万円から1,500万円程となっている。ねぶた小屋の使用料は110万円であるが、毎日小屋を使用し、作業風景を公開すると観光協会から報奨金70万円が出る。なお、ねぶたを22台に制限しているのは、祭り開催時に国道を使用する時間が、警察署取締により夜9時までとなり、その台数を超えると巨大なねぶたが巡行コースを時間内に周り切れなくなるためだという。また、警察署が取り締まる項目は運行時間だけではない。最終的な大きさが台座を含み完成時に幅9m、奥行7m、全高5m以内という規定があり、計測してオーバーした場合は調整をしなければ祭り当日に運行することはできない。様々な規制をクリアし、巨大なねぶたを安全に巡行することが各参加団体には求められている。

紙：紙には新聞紙1頁大の奉書紙（いわゆる障子紙）を2,500枚使用しているが、最近では青森ねぶたでもMOLZA株式会社製のロンテックスを使用しているねぶた師が増えている。

絵具と着色方法：絵具は戦後から黒、白、緑、黄、赤の基本色5色を使って混色し、顔料と染料を使い分けて着色している。鉛筆で下絵を描き、着色方法は筆による手描きだけでなく、着色する箇所を目張りしてエアブラシを吹く場合もある。

照明具：蠟燭の明かりが戦後電球に変わり、昭和30（1955）年頃には蛍光灯を使用するねぶたが登場した。更に現在では多くのねぶたが蛍光灯と電球600～800個を併用しているが、近年LEDの登場によって、平成28（2016）年7月現在、

22台中6台が完全にLED照明へ移行している。照明は、目立たせたいところに白色蛍光灯を使う。ねぶた師の中には寒色の箇所白色の蛍光灯を、暖色の箇所に昼白色の蛍光灯を使用する人もいる。なお、重さ約4tのうち13tが発電機の重量となっている。

**骨組：**骨組には150kgの針金と木材を使用する。針金は数種類の太さを使い分けている。破損の原因となる揺れを抑えるため、複雑な造形を支える骨組の強さがある。

**接着剤：**用紙の接着には木工用ボンドを使用し、1万マスある紙を貼っている。昭和32(1957)年頃は、白玉粉やごはんつぶを使用したこともあるという。

**蠟引き：**青森では蠟引きを蠟書きと呼んでいる。青森ねぶただけでなく各地域の祭り灯籠の特徴として、蠟燭やパラフィンを溶かして下書きした線の上をなぞり、和紙を半透明にさせている。昔は照明具だった淡い蠟燭の明かりを見せるための蠟書きだったが、現在では、色面を分けるためにも行なっている。

**雨対策：**ねぶたの劣化を防ぐため、降雨時は透明のビニールを掛けている。ビニールを掛ける際は、運営本部で統一する。以前にビニールを掛けているところ、掛けていないところがまちまちで苦情が出たため、ビニールを掛ける際は、ねぶた小屋の上部にビニールを設置して、小屋から出るときにビニールが掛かるようにしている。

**保管：**一部の選ばれたねぶたは、祭り終了後、「ねぶたの家ワ・ラッセ」の展示室に保管・展示される。ねぶた祭りの最終日、昔は風習としてねぶたを海上に流したが、現在では船にねぶたを載せて青森湾の海上を巡行した後、解体する。  
**若手ねぶた師の活躍：**取材当日は祭り開催前の連休ということもあり、多くのねぶた小屋で制作が行なわれていた。その中で時間限定で色塗り前の作業風景を公開していたNTTグループねぶたを、制作中のねぶた師の北村春一氏に制作や素材について先ず話を伺うことができた。ねぶたファンを増やすため、作業の区切りごとに公開をしている。今年のモチーフは後光が差している部分が細長く難しい構造となっているが、てこの原理で支えるように骨組を入れている。ねぶたは揺れると紙が剥がれたり骨組が破損するため、骨組が揺れないように制作している。ねぶたに興味を持ってもらうためとは言え、緊迫した状況の中で不特定多数の観光客を制作途中に入れることは、制作物の破損や制作の邪魔が入ると予想される。だが、北村氏に全く焦りはなく、見学者に丁寧な対応をされていた。このような制作途中の公開は、閉鎖的なイメージを払拭し今後の青森ねぶたを発展させるひとつのきっかけとして重要な鍵になるだろうと感じた。北村氏は青森ねぶた若手制作者集団「ねぶた屋」に属している。

この現地調査の前日に立佞武多の館の菊池館長より紹介して頂いたねぶた師の外崎白鴻氏も同じ「ねぶた屋」に属している。外崎氏は青森ねぶた3流派<sup>註4</sup>あるうちのひとつ、ねぶた制作集団「我生会<sup>がせいかい</sup>」へ平成14(2002)年に22歳で加入した五所川原市出身のねぶた師である。外崎氏にも制作や素材について何うと、照明はLED、接着剤は木工用ボンド、紙は目が荒く抜けが良いため使いやすいロンテックス雲漢を使用するという。大和は荒くてナイロン繊維が織り込まれて丈夫なので使用することもあり、新書院

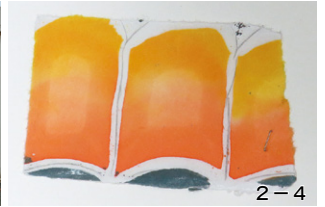


写真2-1. 墨入れされたねぶた

写真2-2. 作業道具

写真2-3. ねぶた小屋の外観

写真2-4. ねぶたの端切れ (提供: わたしたちのねぶた)

写真2-5. ねぶたの家ワ・ラッセに展示中のねぶた

や東屋ねぶた和紙も試しているという。LEDとロンテックスの組み合わせが綺麗だと言うと語る。

**考察：**青森ねぶたでは、五所川原の「潤筆と乾筆」の項で述べたように、流派による着色表現の違いがあり、表現方法が芸術の域に達していると言える。進化のスピードが早い五所川原の立佞武多に対し、青森ねぶたは長年培われてきた伝統的な制作方法や素材が、若手ねぶた師の活躍によって近年少しづつ変化している印象を受けた。電球や蛍光灯の製造中止に伴い、青森ねぶたに限らず日本各地の祭り灯籠の照明具が変わりつつある。揺らぐ蠟燭の灯は染料で着色したねぶたを淡く照らし、幻想的に見える良さがあった。電球は明かりを点在させることができるという長所がある一方、蛍光灯は明るく照らすことができるものの、染料での着色には光が透け過ぎるため、塗り方と位置を検討する必要がある。LED導入の初期投資は費用が掛かるが、耐久性があり消費電力も抑えられ、長期的に考えれば非常に良い材料と言える。

### 2-3 秋田県能代市 能代七夕 天空の<sup>ふやじょう</sup>不夜城製作場

能代七夕天空の不夜城の現地調査は、平成27(2015)年3月、能代市環境産業部観光振興課尾張政克氏、能代七夕天空の城協議会小嶋将氏に対して、市内にある天空の不夜城製作場において、天空の不夜城に関する制作と素材についての詳細を伺った。

**概要：**秋田県能代市で毎年8月6日7日行なわれている能代七夕の一環として、能代七夕天空の不夜城が8月3日4日に開催されている。科学ミュージアムとして平成5(1993)年に開館した能代エナジウムパーク内には、能代

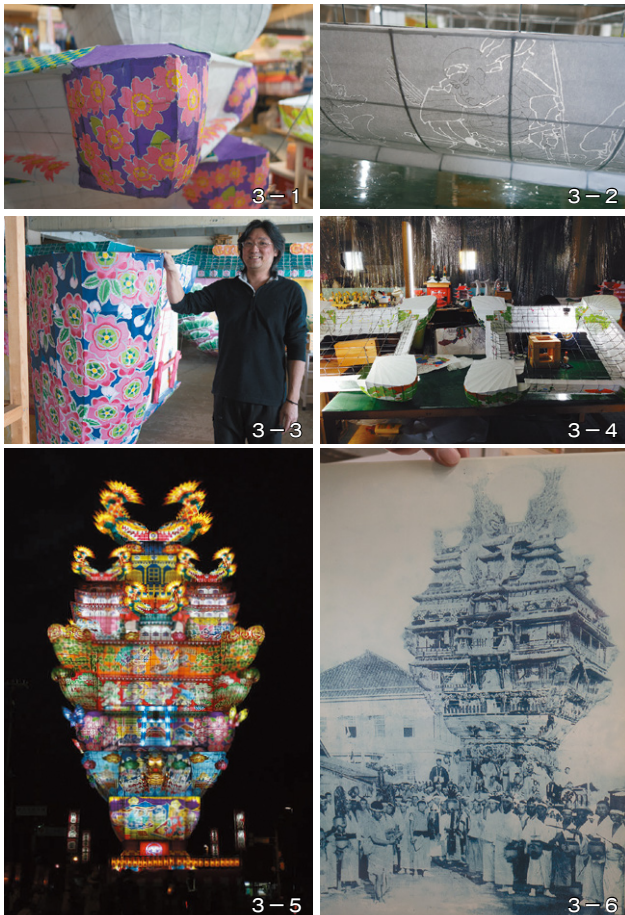


写真3-1. 着色作業中の部品  
 写真3-2. 蠟引き作業中の部品  
 写真3-3. 能代七夕天空の城協議会 小嶋将氏  
 写真3-4. ミニチュア模型での検証  
 写真3-5. 祭り当日の天空の不夜城「愛季（ちかすえ）」  
 写真3-6. 明治時代に撮影された銅板写真（複写）

役七夕の七夕灯籠の常設展示「能代ねぶながし館」が併設されている。

能代役七夕の七夕灯籠：尾張氏によれば、古くから続く能代役七夕の七夕灯籠では、奉書紙を素材として使用していると言う。絵具は食紅で、地元の薬局で赤、ピンク、緑、黄色を購入するが、黄色は他の色よりも倍以上の値段という。黒は墨汁を使い、最近では科学染料に替わってきているという。

天空の不夜城：全高 24.1m、重さ 28 t の大型灯籠「天空の不夜城」の制作を担当する小嶋氏によると、各町内の七夕灯籠の制作は3月から7月末までだが、天空の不夜城は1月から7月末までの制作期間としている。能代役七夕における七夕灯籠と天空の不夜城は、左右対称の形になっているが、これは同部品を同質で大量に制作しなければならず、難しさや苦労があるという。

紙：紙は MOLZA 株式会社製ロンテックスを主に使用し、一部に山梨の金長特殊製紙が生産する凧用の紙を使用している。なお、紙の表面に凹凸があるため、見えない場所や足元の部分で使って実験しているという。

絵具と下絵描具：絵具は「ねぶた・ねぶたカラー」を 10～30% に希釈して使用するようにしている。以前は下絵描具に鉛筆を使用していたが、着色後に鉛筆の下絵線が気に

なったため、熱で消えるフリクションマーカーに換えて制作している。フリクションマーカーで描いた線は、蠟描きの際、高温の蠟燭によって消えてしまう。

骨組：骨組は針金と木材で行ない、針金は凧糸で接合し補強している。骨組は、強度の問題から A3 版の面積が限界と考えている。

照明：照明は蛍光灯の直管を約 200 本、電球タイプを約 200 個使用している。平成 28 (2016) 年に制作された全高約 8m の七夕灯籠に LED を試したところ、影も出ず問題がなかったため、来年は LED に変更する予定という。

蠟引き：蠟引きと呼ぶ。パラフィンをろうけつ染め用の蠟ポットで溶かして使用している。

接着剤：接着剤には耐水性のボンドを使用しているが、乾いた部分は絵具を弾き、色が付きにくいという。

考察：能代市と能代商工会議所の全面的な協力で進められている天空の不夜城は復活して4年程と間もないが、五所川原市の立佞武多を参考にしつつ、素材を研究し、高さを誇る完成度の高い大型灯籠を制作している。他地域の大型灯籠は複雑な造形だが、能代の大型灯籠は左右対称のシンプルな構成が特徴のため、日本一の全高に挑戦することが可能であったと言える。

#### 2-4 富山県南砺市福野 横町会館

福野夜高祭の現地調査報告は、平成 27 (2015) 年 4 月、卒業生の紹介で、横町若連中 OB の梶井利和氏と作業中の若衆に、富山県南砺市福野にある横町会館の作業場にて、夜高行燈の制作と素材についての詳細を伺った。

概要：富山県では、魚津市のタテモン行事、南砺市福野の夜高祭、射水市黒川の夜高祭、富山市岩瀬の曳山車、砺波市庄川の観光祭、砺波市出町の夜高祭、小矢部市の津沢夜高あんどん祭といった各地域で色鮮やかな行燈を繰り出す祭りが存在し、これらは大型の行燈が基台の上に据えられている「夜高型」と櫓状の基台に複数の提灯を高く据えた「タテモン型」に分類される。

今回対象とした福野の夜高祭は神明社の祭礼で、全高約 6.4m、重さ 2 t の夜高行燈と呼ばれる行燈型となる山車の練り回しが毎年 5 月 1 日 2 日の夜に行われ、「引き合い」と呼ばれるけんか行燈が特徴である。

紙：紙は「祭り用の画用紙」として地元の文房具屋に注文するとそれが届くので、どのような種類かは気にしたことがないという。

絵具と下絵描具：絵具は町内にある薬局で購入している染料（食紅）を使用している。染料をベンまたはベニと呼ぶ。赤、青、黄、緑（あおたけ）、ピンク（ほかし）、紫（赤+青）の 6 種類の色を使用し筆で着色している。青には酢酸を混ぜると綺麗に発色するという。下絵は鉛筆を使用している。

骨組：骨組は木材、顔等の細かく複雑で表情がある部品では焼き番線、その他の体や建物、乗り物など、形の単調な所は竹を使用している。骨組みは 10 年以上保管し、山車、傘鉾、吊り物、田楽は毎年修理する。

接着剤：接着剤は町内の表具店に依頼し、表具用の糊を使用して紙を貼っている。

照明具：大行燈は豆電球 200 個使用し、中行燈、小行燈、チビ行燈は LED を各 100 個、50 個、30 個程使用している。



写真4-1～3. 着色中の夜高行燈

写真4-4. 竹の骨組と電球

写真4-5. 板状のパラフィン

写真4-6. 作業中の横町若衆

写真4-7. 南砺市福野創造センター「ヘリオス」に展示されている夜高行燈

蠟引き：パラフィンを溶かして蠟引きに使用するが、これにサラダ油を加えると筆書きが滑らかで使いやすいという。田楽武者絵は、描き手がいなくなり、古いものをそのまま補修しながら使用している。

雨対策：他町内も同様に余程の降雨でない限り行燈にビニールを掛けることはない。但し、祭りの初日は翌日を考慮しビニールを掛けることがあるものの、2日目は最終日ということもあり、観光客に披露する目的でビニールは掛けないという。

「引き合い」対策：「引き合い」に対して、鉄製アングルやコンパネ、竹の2枚貼りや3枚貼りをしている所もあるようだが、取材した横町では、壊されないよう体を張って守り抜くという。

武者絵：文化創造センターヘリオスには、横町の夜高行燈と幅188cm、奥行81cm、全高303cmの連楽（田楽）が展示されている。連楽の武者絵は15年以上保管して使用している。大奉書紙は48cm×77cmの大奉書紙を16枚貼ったと言われ、実測したところ縦横各4枚を継いだことが判った。表具師によれば、今の紙は大きさが変わっているため連楽に合わせて貼継ぐという。なお、側面には継ぎ目がなくロール紙で制作していることが判っている。展示されている唐獅子の連楽は、大きめで幅160cm、全高220cm程で、これだと9枚貼り、町内の練り廻しは、6枚に継ぎ足した変形9枚弱であろう。武者絵は絵師の塚本氏によるもので、大半の町内がこの人の武者絵を用いている。戦前は描く人が

何人も存在したという。文字は各町内の書家、能筆家に依頼している。

考察：福野夜高祭では、厳格な祭礼のしきたりのもとで「引き合い」と呼ばれるけんか行燈が行なわれるため、各町内の対抗意識も強く、団結力が強く求められている。そのため、夜高行燈の制作は先達から受け継いできた伝統的な制作方法で行なっていると言える。気象庁の統計によると、祭礼当日の降雨が過去複数回観測されている。絵具として用いる染料は降雨には弱い、透過性に優れるため、美しい光を放つ利点がある。引き合いと降雨による行燈の劣化により毎年制作する必要があると予想されるため、儚さと美しさを追究した祭りと言える。

## 2-5 石川県珠洲市 飯田町燈籠山祭り保存会

飯田町燈籠山祭りの現地調査は、平成27(2015)年9月、飯田町燈籠山祭り保存会会長の藤野裕之氏、飯田町祭礼委員会祭礼委員長の濱野重雄氏、祭礼副委員長の徳田善次氏に対して、石川県珠洲市にある事務局や倉庫において、制作と素材についての詳細を伺った。

概要：かつては北前船の寄港地であった能登半島の先端にある石川県珠洲市は、平成27(2015)年現在の人口が約14,600人の市である。この地で開催される飯田町燈籠山祭りは、370余年の歴史を有する春日神社の神事で、毎年7月20日21日に実施される。「燈籠山」とは、下から地山・屋台・柁障子・小台・大台・人形と重ねあげた全高約16m、重さ約5.5tとなる祇園系の曳山で、祭りではこれを曳き廻す。人形を載せたキリコは、全9基の山車のうち、南町、南浜町、燈籠山（全町内の代表）の3台に設置される。川本氏の自宅に人形が保管されていたことをきっかけに、大正時代初期の電柱架設工事で消滅した燈籠山を復活させようと有志達により昭和58(1983)年に燈籠山一基を復原させた。復活させる際には青森のねぶた師、千葉作龍氏に指導を受けた。なお、昭和29(1954)年の珠洲市市制記念行事、昭和39(1964)年の能登線開通記念行事に人形を載せた燈籠山が復活したことがあったという。

制作と保存：人形は復原制作した昭和58(1983)年から使用し、柁障子、小台、大台は2年に一度制作を行なう。制作は1月から2月に人形の図案を決め、3月から4月に下絵の制作、5月から7月に実制作を行なう。部品の制作をわくわく広場の屋内で行い、屋外で組立てを行う。

骨組：昭和58(1983)年から昭和63(1988)年までは竹の骨組に布を縫い付けていた。現在では12番線の針金を使用している。

紙：飯田町燈籠山祭りの燈籠は、燈籠山山車に人形を設置する位置が高く、破損すると修理できないため、平成元年(1989)年からは骨組に貼る紙を全て布に変更した。ナイロン製の布も試したが絵具や墨を弾くため、最終的に表面加工されたキャラコを採用した。大変丈夫で厚めの布だが、照明の灯りはしっかりと透過させる。縫い付けるのは婦人会の役目と言う。

絵具と下絵描具：下描きは鉛筆を主に使用し、油性の細いペンも使用している。20日程度の日数を掛け布にポスターカラーで着色する。着色は各町内で異なるが、濱野氏はポスターカラーに黒を混ぜて彩度を落としている。また、形



写真5-1～4. 保管中の燈籠山人形と濱野重雄氏  
 写真5-5. 祭礼当日の燈籠山山車巡行  
 写真5-6. 着色された燈籠山人形の端切れ(布)  
 写真5-7. 整備された町並み

が出来ないところは影を描いて工夫している。  
**蠟引き**：蠟入れと呼ぶ作業で、蠟燭を溶かして行なっている。パラフィンやろうけつ染め用の蠟も試したが、使いづらかった。紙を使用している他の地域同様、内部の照明を際立たせるため蠟入れを行なう。蠟入れした部分を日中の光源で見ると濁って見えるため分かりづらい。  
**照明**：大台の照明は蛍光灯で、上部の人形は球形蛍光灯やLEDを使用する。LEDは高価なため、数年前から徐々に導入している。動力源にはレンタルした2,000Wの発電機を積むが、電圧はやや抑え1,500～1,800W程度にしている。予算は人形で200万円弱、大台を含めると300万円程度掛かるが、材料費だけではなくボランティアや町民から好意での材料提供なども多く、この限りではない。  
**部品の分解**：各部分が完成すると、これを横に串刺し状にして、滑車で組立てていく。大きな塊として制作し、トラックで運搬できる大きさに分解して行く。針金は結束バンドで固定する。平成元(1989)年に石川県内の和倉で5大祭りが行われた際、ウィングトラック4台、10tトラック1台、4tトラック1台分の量を運ぶ必要があり、その時から針金で骨組を行うようになった。その後も東京ドーム、北九州小倉や札幌ドームでのイベント参加はこの方法で行なった。  
**雨対策**：祭りが開催される7月20日、21日の天候は、梅雨が明けるかどうかの時期で晴天と降雨の両方の場合がある。風は緩やかだが、南東の風が吹く場合があり、昔は全

高約16mの燈籠山を倒さないよう、補助の綱を引く担当者が平屋の屋根づたいに歩く姿もあったという。降雨対策は、人形、大台、小台の布に塗装業者が一週間でシリコン塗布を施し、ビニールを掛けるものもある。

**考察**：復活させる際に参考としたのは青森ねぶたで、見学に行ったねぶた小屋で作業していたことがご縁で、青森のねぶた師である千葉作龍氏とも親交を重ね、制作の研究を行なった。そのため、燈籠を制作したあとで人形燈籠を分解するやり方は、青森ねぶたと同様である。青森では毎年ねぶたを制作するが、飯田では燈籠山を保管して使用する。紙から布に変更されたのは、その土地の風土や考え方に合った素材を研究した結果だと言える。

## 2-6 愛知県刈谷市 刈谷<sup>まんど</sup>万燈保存会

愛知県刈谷市で行なわれている刈谷万燈祭の現地調査は、平成27(2015)年10月、愛知県刈谷市にある刈谷郷土資料館と銀座万燈蔵にて、郷土文化指導員の大谷悟氏、刈谷万燈保存会副会長の竹内敏広氏に、万燈に関する制作と素材について詳細を伺った。

**概要**：愛知県刈谷市は、自動織機を開発した豊田佐吉が設立した豊田自動織機の誘致を契機に、現在の工業都市に発展した人口約150,000人(2016年10月現在)の城下町である。刈谷万燈祭は刈谷市銀座に所在する秋葉社の祭礼で、毎年7月の最終土・日曜日に実施される。竹と和紙で作られた万燈と呼ばれる張紙人形を担ぎ手が一人で担ぎ、お囃子に合わせた舞を奉納し、火難防除・町内安全を祈願する。昭和60(1985)年頃、刈谷市の郊外に大型店舗ができた影響で駐車場のない商店街は、車の移動が中心だった買い物客に対応できず店舗が消滅して行ったが、祭だけはかろうじて残った。またその頃、少年の非行問題とその少年達の祭での行動が問題になり祭の印象が悪かったものの、平成12(2000)年に愛知県の無形民俗文化財となってからは祭のあり方も検討され、保存会を中心に祭の運営を整備している。  
**制作**：各町内2体の万燈を所有し、2年毎に新しい万燈を1体制作している。その万燈の種類は幅3m、奥行1.5m、高さ5m、重さ60kgの大万燈、幅1.5m、高さ2m、奥行1m未満、重さ20kgの中万燈、重さ1kgの小万燈の3種類あるという。人手が多い町内は翌年の4月から制作を始めるが、人手が少ない町内は祭り終了直後の10月から11月に構想へ入り、3月から4月に実制作を始める。万燈祭には7町内と市内にあるデンソー、アイシン、豊田自動織機のトヨタグループ企業3社と地区や団体が合同で参加している。竹内氏によると文化財指定後は万燈蔵と呼ばれる作業場で制作を行なっているという。  
**紙**：紙は縦600mm、横900mmの美濃和紙極厚を150枚程使用する。裏面の色が乗らないところや、破れやすいところは株式会社ワーロン製のワーロンタフトップという強化障子紙を使用している。  
**絵具と下絵描具**：色付け(着色)は、筆を用い、下描きには画用木炭を使用している。食紅とポスターカラー、墨は墨滴を使用する。武者絵や歌舞伎を題材にしたものが多く、人物の顔は平坦なことが特徴で、愛知県岡崎市の凧絵師に顔を描いてもらうが、題材に苦慮しているという。近年では下絵をコンピュータのアプリケーションソフトで描き、



写真6-1. 万燈の内部  
 写真6-2. 保管庫の様子  
 写真6-3. 絵具保管棚  
 写真6-4. 自動車のヘッドライト用電球  
 写真6-5. 子供万燈  
 写真6-6. 粒状のパラフィン  
 写真6-7. 明かりを灯した銀座の万燈  
 写真6-8. 万燈を担ぐ竹内氏

ベースの色を決めるようになった。

**照明：**昭和45(1970)年までは照明に蠟燭を使用していたが、現在は電球とLEDを併用するようになった。蠟燭は入れられる場所も限られ、4～5本だったが、電球は1基当たり20～30個を使用している。電球とバッテリーは、自動車用を使用する。自動車用の電球は、一般品よりも光度が強いことが利点である。電球の場合、バッテリーの持続時間は20分から30分程だったが、平成16(2004)年から光源にLEDを使用し、バッテリーが1時間持つようになったという。LEDは刀などの薄い造形の骨組に入れたりする。蠟引きは見栄えが良く見える範囲でなるべく太くするようにして、光が通るようになるという。

**骨組：**縦を竹、横を材木で将棋の駒形をした土台を作り、心棒を丸太または角材で万燈台を作る。万燈を担いだ時に全体のバランスが肩の上に来るように、張紙人形の部品を取り付けていく。骨組に使用する竹は、劣化を防ぐため塩水に漬けて虫を駆除する。

**接着剤：**接着剤には工業用糊を使用している。竹でできた張紙人形の骨組は、凧紐や麻紐で結びつけ、工業用糊で固める。

**蠟引き：**蠟引きはパラフィンを溶かし、毛筆で描く。明かりを灯した際の光量を上げるため、見栄えが良く見える範囲でなるべく太くするようにして、光が通り易いようにする。

**雨対策：**刈谷万燈祭の開催時期は、雨の影響が余りない梅雨明け後となる。特に防水加工のコーティングをしないため、食紅で色付けした表面に雨が当たると点状に色が抜けてしまう。雨天時にはビニールを掛ける。平成27(2015)年まで、過去25年間の祭礼開催日の降雨量を気象庁の統計で確認する限り、雨天の方が少ない。

**考察：**万燈の特徴は担ぐことである<sup>注4</sup>。また、トヨタ自動車のお膝元である刈谷らしさは祭りにも特徴が出ている。竹内氏の町内では、自動車部品を製造する会社に勤務する制作仲間のアイデアで、自動車のヘッドライト用の電球やバッテリーを取り入れるようになった。60kgの重量を担いで舞う奉納は、担ぎ手の力量を披露する華々しい場である。一方で、担ぎ手の負担軽減を考慮し過ぎることはしないと竹内氏は言う。軽くすることは力量のなさを晒してしまうからだ。軽量化とプライドの闘ぎ合いが制作の面白さと感じた。なお、刈谷の気候も祭り軽量化につながっていると言える。雨の影響が余りないため、防水加工のコーティングをしないことも軽量化に関わると言える。

## 2-7 宮崎県都城市 おかげ祭り振興会

都城六月灯おかげ祭りの現地調査は、平成28(2016)年3月、宮崎県都城市にあるおかげ祭り振興会の事務所と倉庫にて、会長の川本翰治氏、副会長の黒岩常正氏、理事の増田裕三氏に対して、大燈籠山車に関する制作と素材について詳細を伺った。

**祭りの歴史的背景：**旧薩摩藩領内だった鹿児島県や宮崎県都城地方では、「六月灯」という夏祭りがある。六月灯の由来については2説あり、1つは、初代藩主島津忠久が鎌倉で逝去した安貞元(1227)年旧暦の6月18日を「御忌日」と称して島津家やその家臣たちが供養し、その折り灯籠を灯したことから起こった説、もう1つは19代藩主島津光久が約三百数十年前、鹿児島島の城山下にあった上山寺の観音を竣工したのが旧暦の6月18日で、この日に灯籠を寄進し、家臣もこれにならって灯籠を寄進したことから始まった説がある。藩政下では盆・正月しか休むことのできなかった農民も、この「六月灯」の時だけは公然と休むことができた。暑気の厳しい時期に朝から休むことのできる唯一の手段として、それぞれ日を設け、どんな小さな社祠でも「六月灯」を催すことになったのだという。また、「六月灯」の伝播は、明治時代末期まではログツノオツメアゲ(お燈明上げ)と呼ばれ、牛馬が病気になったり稲の病害虫が発生する6月に、神や仏に毎晩夜明かしの燈を上げ無事を祈ったという風習が伝承されてきたからだとも言われている<sup>注6</sup>。

都城六月灯おかげ祭りは、都城の総鎮守と言われる神柱宮の六月灯に合わせて、毎年7月8日、9日に開催される宮崎県都城市の祭りであり、宵祭りでは明かりを灯した8基の大燈籠山車を曳く献灯祭が行なわれる。バブル崩壊後の平





写真7-1～2. 保管されている燈籠山車  
 写真7-3～4. 組み立て作業  
 写真7-5. 大判出力用フィルム  
 写真7-6. 倉庫として使われている旧都城市民会館  
 写真7-7. 祭り当日の大燈籠山車

成5（1993）年、商店街の衰退による中心市街地活性化のために始められたが、単なるイベントではなく神事に近く、日本の生活文化として培われてきた伝統ある祭りの仕組みや本質を学び、地域住民の連携の再構築を目的として「本物の祭り」を目指している。平成28（2016）年現在、「六月灯」は上述の通り歴史ある祭りにも関わらず、鹿児島県と宮崎県都城市では無形民俗文化財に選定されていないことを述べておく。おかげ祭り自体は平成5（1993）年からの開催だが、「六月灯」という伝統的な地域の祭りの流れを汲む祭りであるため、おかげ祭りを研究対象として現地調査を行なった。

**概要：**川本氏によれば、祭りは手弁当で始め、助成金は祭りに使う道具の購入や制作に当て、様々な職業の人々が集まり、知恵や技術を持ち寄って、こだわりを持って丁寧に進めながら整えたという。大きさ2間四方、全高約4.4m、重さ約1tの大燈籠山車には角型灯籠と三角錐型灯籠がある。角型の武者絵燈籠は毎年2基づつ新しく制作し、2～3年保管し使用する。旧都城市民会館<sup>註7</sup>等を分解した大燈籠山車の部品を保管する倉庫として使用している。当初は絵燈籠を2基制作した。5基の三角錐型の大燈籠山車は5～6年保管し使用している。

**絵具と下絵描具：**描画はコンピュータのアプリケーション

ソフトを使用して行なう。

**紙：**紙は和紙から株式会社ワーロン製の強化障子紙に変更したが、現在では更に大判プリンターでフィルムに印刷し、骨組に両面テープで貼っている。フィルムになってからは、それを保管するようになった。

**骨組：**当初は骨組は木材だったが、現在はアルミに変更している。

**照明：**当初は照明に電球を使用していたが、現在は蛍光灯を使っている。

**雨対策：**都城は7月前後に梅雨が明けける。開催中の雨は鳥津雨と呼ばれ、喜びの雨とされているが、余り雨は降らない。

**考察：**六月灯に関しては、旧薩摩藩領内の鹿児島県内や都城では、年中行事として歴史もあり、浸透している祭りではあるものの、県や市の無形民俗文化財には指定されていないことが意外であった。また、都城六月灯おかげ祭りは現地調査で話を伺うまで、新しく作った祭りだと判らなかつた程、伝統ある他地域における祭りの仕組みや本質を研究し、大燈籠山車の制作では新しい技術を取り入れ、「本物の祭り」を再構築していると実感した。

### 3. まとめ

今回の現地調査の結果は、紙、絵具、下絵描具、照明、骨組、接着剤、蠟引き、雨対策の項目を中心に整理した。各地域の祭りの特色は、祭り灯籠の制作にも色濃く出ていると言える。素材に関しては、紙は和紙から建材にも使われる強度の高い用紙へ、照明は蠟燭、電球、蛍光灯等からLEDへ、骨組は竹から針金への移行が顕著である。時代変化の影響により製造中止となった素材を新しい製品へ換えざるを得ない事例と、よりよい祭り灯籠を作り出すために新しい素材を積極的に取り入れる事例が増えてきている。一方で、伝統を忠実に継承していく制作者たちもおり、伝統の継承に対する考え方が異なることも判ってきた。しかしながら、各地域の制作者たちは、いずれも安全に祭りが行われることを第一に、造形的に華々しく美しい祭り灯籠を追求し制作していることは明らかである。

次回の研究報告では、新潟県村上市の七夕祭の現地調査を中心に報告する予定である。

### 謝辞

今回の各地域での現地調査で特にお世話になった、立佞武多の館菊池忠氏、立佞武多師の齊藤忠大氏、ねぶたガイド隊のガイドさん、外崎白鴻氏、横町若連中OB 梶井利和氏、能代七夕天空の城協議会小嶋将氏、飯田町灯籠山祭りの濱野重雄氏、刈谷市郷土資料館の大谷悟氏、刈谷万燈保存会の竹内敏広氏、おかげ祭り振興会の川本翰治氏には、突然の調査願いにも関わらず、事前連絡と当日の現地案内説明をして頂きましたこと、心より感謝申し上げます。また、「ねぶた・ねぶたカラー」の開発や絵具について聞かせて頂いたターナー色彩株式会社研究開発室の西原克俊氏、富山県の祭りや福野夜高祭についてお聞かせ頂いた南砺市福野の往蔵久雄氏、前回同様、村上市郷土資料館の桑原猛氏、現地調査の同行や調査結果の整理等を手伝ってくれた当学非常勤講師・研究員の矢尾板和宣氏にも心から感謝申し上げます。

## 注釈

- 参考1：大谷悟（刈谷市郷土資料館 郷土文化指導員）：「万燈」にかかわる内容について（資料）／2013.1  
参考2：五所川原市／立佞武多／p.p5～6／2010.6  
参考3：全国山鉾屋台保存連合会魚津大会実行委員会事務局、祭屋台等製作修理技術者会：富山県の築山・曳山・行燈／p.p2～9、p.25、p.33、p.p38～40／2012.5  
参考4：都城市史編さん委員会編：都城市史第7章年中行事と祭り／p.66、p.p295～296、p.p411～415／1996.3-2006.6  
参考5：鹿児島県立青少年研修センター郷土行事研究グループ：ふるさとの行事かごしまーかごしまの青少年のためにー／19 六月燈／p.p37～38／1979.10  
参考7：おかげ祭り振興会：都城六月灯おかげ祭り資料／p.1／2015  
参考8：鹿児島県県民福祉部県民生活課：かごしま文化の表情／p.p78～79／1991  
参考9：珠洲市史編さん専門委員会：珠洲市史／p.964／1979.2  
参考10：青森市：青森ねぶた誌 増補版／p.155、p.175、p.177、p.p179～180、p.p182～198、p.218、p.238、p.p340～343／2016.8  
参考11：千葉作龍：名人が語るねぶたに賭けた半世紀／草雪舎／p.236／2014.7  
参考12：ホルベイン工業株式会社：絵具の科学／中央公論美術出版／p.19／1992.4  
参考13：ホルベイン工業株式会社：絵具材料ハンドブック／中央公論美術出版／p.179／1991.9  
参考14：ホルベイン工業株式会社：絵具材料ハンドブック／中央公論美術出版／p.50／1996.12

## 参考 URL

- 参U1：文化庁 国指定文化財等データベース [http://kunishitei.bunka.go.jp/bssystem/index\\_pc.asp](http://kunishitei.bunka.go.jp/bssystem/index_pc.asp)（2016.10 閲覧）  
参U2：立佞武多の館ウェブサイト <http://www.tachineputa.jp/festival/outline.html>（2016.10 閲覧）  
参U3：ターナー色彩株式会社／ねぶた・ねぶたカラー <http://turner.co.jp/paint/neputa/index.html>（2016.10 閲覧）  
参U4：MOLZA 株式会社 <http://www.molza.co.jp>（2016.10 閲覧）  
参U5：青森ねぶた祭りオフィシャルサイト <https://www.nebuta.or.jp/archive/nebuta/2016ntt.html>（2016.10 閲覧）  
参U6：青森ねぶた若手制作者集団「ねぶた屋」 <http://www.nebutaya.com/>（2016.10 閲覧）  
参U7：金長特種製紙株式会社公式サイト <http://www.0552725111.com/product05/index.html>（2016.10 閲覧）  
参U8：飯田町燈籠山祭り公式 web サイト <http://toroyama.nt08.com/>（2016.10 閲覧）  
参U9：刈谷万燈祭公式 website <http://www.katch.ne.jp/~mando/index.htm>（2016.10 閲覧）  
参U10：都城六月灯「おかげ祭り」公式ホームページ <http://www.okagematsuri.jp/>（2016.10 閲覧）  
参U11：株式会社ワーロン公式サイト <http://warlon.co.jp/>（2016.10 閲覧）

## 注記

- 注1：京都造形芸術大学では、マンデイプロジェクトという授業で1年生全員が京造ねぶたを制作する。着色は施さない白い立体。  
注2：顔料には種類が多くあり、用途によって色々と使い分けられる。着色顔料の種類も多く、大きく分けて有機顔料、無機顔料がある。一般的な性質として、有機顔料の特長は、色の種類が多く、鮮明性が高く、着色力が大きく、価格は高価。無機顔料の特長は、耐候（光）性が強く、耐熱性が高く、隠蔽性が大きく、比重が重く、価格は安い、と言える。隠蔽力（顔料や絵具による下層を覆い隠す能力）が高いとムラになりにくい。  
注3：色を画面に展げる働きをする展色材と練り合わせた際に透明になる顔料。色濃度、粘度、透明感、耐久性の調節に用いる。  
注4：ねぶた制作の専門家を「ねぶた師」と呼ぶ。青森ねぶたにおけるねぶた師の三流派とは、初代ねぶた名人の北川金三郎氏、旧荒川村出身の弟子を多く輩出した川村伯鳳氏、昭和初期に活躍した千葉作太郎氏の3名から始まる師弟関係の系譜で、北川系、荒川系、千葉系と呼んでいる。（参考10、11）  
注5：青森でも大正末期から昭和初期にかけては一人担ぎねぶたが主流であったが、戦後になると少なくなっていき、リヤカーへ移行していった。（参考10）  
注6：参考4  
注7：旧都城市民会館は昭和41（1966）年に建築家の菊竹清訓氏の設計によって完成した建築物で、2006年には、DOCOMOMO JAPAN 選定 日本におけるモダン・ムーブメントの建築に選出されている。都城市は建物の老朽化などで2007年末に解体する予定だったが、学校法人南九州学園に20年間の無償貸与され現在も保存されている。

## 撮影

吉川賢一郎、矢尾板和宣、齊藤忠大（写真1-7、8）、小嶋将（写真3-5）、濱野重雄（写真5-5）、おかげ祭り振興会（写真7-3、4、7）

## 協力

立佞武多の館館長 菊池忠、五所川原市経済部観光物産課 技能技師（立佞武多師）齊藤忠大、ターナー色彩株式会社研究開発室 西原克俊、青森観光コンベンション協会、ねぶたガイド隊、外崎白鴻、北村春一、往蔵久雄、横町若連中OB 梶井利和、能代エナジウムパーク、能代市環境産業部観光振興課 尾張政克、能代七夕天空の城協議会 小嶋将、飯田町燈籠山祭り保存会会長 藤野裕之、飯田町祭礼委員会祭礼委員長 濱野重雄、祭礼副委員長 徳田善次、刈谷市郷土資料館 郷土文化指導員 大谷悟、刈谷万燈保存会副会長 竹内敏広、おかげ祭り振興会会長 川本翰治、同副会長 黒岩常正、同理事 増田裕三、村上市郷土資料館 学芸専門員 桑原猛、長岡造形大学図書館、長岡造形大学 造形学部 建築・環境デザイン学科 平山育男教授、長岡造形大学 研究員 矢尾板和宣（以上項目順）